

令和6年度をふり返って

国 語 科

研究 主題	言語活動を通して考えや思いを深め、「話す力」「聞く力」「書く力」「読む力」を育てるための指導法の工夫
成果	・グループディスカッションのための話し合いのこつや、スピーチの仕方を確認し、実際のスピーチの映像を活用することで個のふりかえりにつながった。 ・互いの発表内容を観点に従って評価し合うことで、統一した論点で話し合うことができた。 ・タブレットの思考ツールを活用して必要な情報を集め、話し合いを通してよりよい文章になるように小集団で推敲し合うことができた。 ・古典教材では映像から時代背景を確認し、ものの捉え方を現代と比較して考えて意見を交換することで深い読みにつながった。
課題	・タブレットの思考ツールのまとめに比重がかかり、対話的な学びが希薄になる場面があったので、端末とワークシートのバランスのとれた活用が必要である。 ・根拠や観点に従って長い文章を書くことができない生徒に対して、スモールステップを意識した個に応じた指導をする。

社 会 科

研究 主題	地理、歴史、公民の各事象について、課題意識をもって自主的に思考し、自分の意見を形成する指導法の工夫
成果	・書画カメラ（プロジェクター）を資料の提示、板書、調べ学習の確認、発表など、多様な場面で活用できた。 ・個々で、教科書を読み取る時間があることが、読み取りが苦手な生徒の補助になった。
課題	・ロイロノートを活用して、生徒が課題に取り組むばかりではなく、個々の考えの共有の仕方や、話し合い活動への展開につげ効果的な活用方法。 ・書画カメラ（プロジェクター）を資料の提示、板書、調べ学習の確認、発表など、多様な場面で活用方法。

数 学 科

研究 主題	基礎・基本の定着と、既習事項や数学的な思考を利用して解決する力を育てる指導法の工夫
成果	・課題解決の際、ペアやグループなど学習形態を工夫したところ、自ら課題解決に取り組む姿勢が見られ、生徒の学習意欲が向上した。また、学習内容の理解が深まり数学的な考え方のよさに気づかせることができた。 ・基礎・基本を定着させるために、A I ドリルを活用したところ、個々にあった難易度の演習問題に取り組むことができるなどの効果的がみられた。
課題	・ペアやグループ活動でのI C T機器の導入を行い、対話的な場面での活用を図ったが、関数の分野の場面では、グラフを瞬時に表示できてしまい生徒の思考段階を減らす場面もあったため、今後はI C T機器を導入する単元を精査していく必要がある。

理 科

研究 主題	理科の見方・考え方をはたらかせ、科学的に課題を解決する力を高める指導法の工夫
成果	・実験操作の説明や実験結果の入力を、ロイロノート上で1年通して行った。説明や結果の記録が短時間で行うことができた。また、共有ノートを活用することで、他班との結果の比較を容易に行うことができた。 ・実験がうまくいかなかったり納得したデータを得られなかったりした時は、その理由を考察させ、再実験させることで、探究的な思考力を高める取組を行うことができた。 ・単元末に既習内容を活用する学習課題を用意し、単元を通して考えさせることができた。また、主体的に学習に取り組む態度の評価項目で、自らの指導に生かすことができた。
課題	・ロイロノートを活用したことで、実験中の役割が固定化し、実験を体験する生徒が偏ってしまった（実験操作担当、ロイロノートに記録する担当が毎回同じ傾向が見られた）ため、教師が役割を指示する必要があった。 ・実験結果がロイロノート、考察が各々のノートにしたため、実験結果と考察が別の場所に記入されており、後から見返したときに、内容を想起しづらくなってしまった。実験結果を自分のノートやワークシートに確実に反映させる指導が必要と考えられる。

英 語 科

研究 主題	既習事項を活用し、目的・場面・状況に応じて、自分の考えや気持ちを表現する力を高める指導法の工夫
成果	・ 個人やペア活動で何度も音読練習した後、場面に応じて、自分の考えや気持ちを言う反復練習を行った。継続することで、自分の気持ちを伝えることができた。 ・ 会話の継続を目的にやり取りを行い、インプットと練習量を増やすことで、おっくうがらずに活動できるようになってきた。
課題	・ 表現力を高めるために、小さなステップで英文を作る練習を行って、少しずつレベルを上げていく課程も必要だと感じた。また会話のやり取り活動では、語彙や表現、文法の間違いに対する指導が丁寧に行えなかったので、課題が残った。

音 楽 科

研究 主題	学習意欲を喚起し、既習事項を生かして自分の思いを表現したり演奏したりするための場面設定や方法の工夫
成果	・ 端末に学習動画や音源を配布したことで、聞き直しをしたり確認をしたりと、個の能力に応じて課題に取り組んだり、やり直しをしたりしやすくなった。 ・ ペアやグループでの活動によって、より自分の考えを深めていた。 ・ 事前に既習事項を確認することで、自ら考え課題に取り組もうという姿勢が見られた。
課題	・ 言語表現が苦手な生徒の評価をどうするか、その生徒の学びの状況の見取り方。 ・ ICT 機器の使用により、一人一人の活動はしやすくなったが、反対に進度の差が大きくなることもあるため、それを考慮した授業展開。 ・ ワークシートと ICT 機器の使用場面の工夫と、グループ活動もできる授業環境の再考。

技 術 科

研究 主題	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、生活を豊かにするための課題解決へ見通しをもたせる指導法の工夫
成果	・ A材料と加工の技術では見本や手本などを見て作業に見通しをもち、生徒は作図や製作に意欲的に取り組んだ。 ・ B生物育成の技術ではT 2の支援の元、作物を地植えすることができた。これにより夏期休業中は管理作業をせずに育てることができた。 ・ Cエネルギー変換の技術では安価な実習教材を使って電子部品の働きを学習し、評価試験を行うことができた。製作品は短期間で完成し、文化祭や公民館祭り、弘前市技術・家庭科作品展に展示することができた。 ・ D情報の技術ではw e b上でのコンテンツを利用した、A Iやプログラミングの体験を通して関心を高めることができた。
課題	・ Aでは第三角法による正投影図を1年生に理解させることが難しい。組み立ては生徒同士で行うのが難しいため、指導者がかなり支援したが、待機する生徒が多く、製作が遅れた。 ・ Bでは育成した作物を生徒に収穫させ、活用させることができなかった。 ・ Cで採用する製作実習教材は使わずに廃棄する部品が多いため、無駄を感じる。また特に機械分野ではなかなか関心を引き出せない。 ・ Dではコンピュータ室のコンピュータが撤廃されたため、計測・制御の実習教材が使えなくなった。今後新たな教材の開発が課題となっている。

家 庭 科

研究 主題	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、生活を豊かにするための課題解決へ見通しをもたせる指導法の工夫
成果	・ A家族・家庭生活の内容では、視聴覚教材を用いて、自分自身の生活をふり返ることができ、中学生としての自立や家庭生活、幼児・高齢者との関わりについて関心を高めることができた。 ・ B衣食住の生活の内容では、製作物を通して基礎基本縫いの定着を図ることができ、文化祭や公民館祭り、弘前市技術・家庭科作品展に展示することができた。 ・ C消費生活・環境の内容では、ロールプレイなどを通して消費者意識を高めることができた。
課題	・ Aでは、家庭環境に配慮して授業を進めている。今後も取り扱い内容を精査しながら授業を進めていきたい。 ・ Bでは、基礎縫い定着度合いに差があり、縫い作業に苦手意識を持つ生徒へのアプローチ方法を検討していきたい。 ・ Cでは、高校の家庭基礎にもつながる金融教育の内容のため、教材研究を進め、授業内容や手法の工夫が必要だと感じた。

保 健 体 育 科

研究 主題	課題に応じた運動に取り組み、共に学び合う生徒を育てるための指導法の工夫
成果	・各単元で毎時間の取組やその結果、感想を体育ノートに記入させた。また、各単元をとおして、学んだことについてもまとめさせることで、次の単元での目標設定につなげることができた。 ・苦手な種目について、自己の動作で表現できなくても、その動作についての知識を学び、仲間に教えることができるようタブレット端末を活用して思考力や探求力を身に付け、自己指導能力を高めることができた。 ・ペア学習やチームでの活動を多く取り入れることで、仲間と協力して取り組む姿勢を身に付けさせるとともに、課題に対して、主体的に取り組む姿勢をより高めることができた
課題	・タブレット端末を使用することで、運動量の確保が困難であった。その両立に工夫が必要と感じた。 ・保健の授業を実施する際、教師側の一方的な授業にならないよう、生徒間の学び合いやタブレット端末を使用するなど工夫したつもりではあるが、興味関心を高める工夫がさらに必要であったと感じた。

令和6年度 研究主題のまとめ（アンケート・次年度について）

研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の在り方」
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実する工夫

（１） 研究の成果と課題

成果

- ・副題の取り組みとしてICTの活用を意識し、ロイロノートの共有ノートを活用した授業を実践した。
- ・「めあて」「まとめ」「ふりかえり」を明確にした授業作りに取り組んだ。
- ・教科の特性もあり、「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」を念頭においての授業作りを実践できた。
- ・「個別最適な学び」とはどのような場面で導入し、毎時間の授業にどう取り入れていくかを考えるよい機会になった。
- ・AIドリルの活用により、生徒の個に応じた演習が行うことができた。
- ・「協働的な学び」を意識してグループ活動を多く取り入れたことで、解決法や説明の学習で言語化が難しい場面で互いにフォローし合って活動する場面が多く見られた。
- ・学習アンケート内容が生徒と教師でリンクしていたため、授業改善において参考になった。
- ・対話し深い学びをするための授業展開を改めて考えることができたという意見が多かった。

改善点

- ・「個別最適な学び」については自らの指導に課題があると感じる教師がいる。知識技能の習得としてワークやAIドリルを活用していたが、学習に苦手意識がある生徒はAIドリルを好んで取り組んでおり、それが個別最適化かという疑問も残った。
- ・1人1台端末やICT器機が積極的に活用されたが、今後は個に応じた指導につながっているか、生徒の深い学びにつながっているかなどを検証する機会があれば考える。どのような視点で活用すれば効果的なのか研修し、使用することが目的にならないようにしたい。
- ・「個別最適な学び」に関しては指導が難しく、よりICT等を活用した授業を構想していきたい。
- ・生徒がより課題に対して主体的に取り組もうとする態度を養うための導入や展開を考える必要がある。
- ・グループ活動での適性人数を場面に応じて吟味する必要がある。
- ・1人1台端末に不慣れなため、対話的な活動が不十分だった。
- ・効果的にロイロノート等を利活用できなかった。
- ・「協働的な学び」の場面の設定が不足していた。

(2) 来年度の研究主題案について

(A 主題、副題継続 B 主題は継続、副題を変える C 主題を変える)

A 7 人	・個別→協働→ふり返りの流れで授業を行ったことで生徒の理解が深まったと感じる。また、副題は令和の日本型教育の構想目標にもなっているため今後も継続すべきと考える。 ・今年度実践できなかった部分があるので次年度も継続して研修したい。 ・今年度設定されたテーマのため継続したい。 ・各教科に共通して取り組みやすく、自分自身継続して研修したいテーマである。
-------------	---

B 2 人	・研究授業の視点が「対話的」な部分と「協働的な学び」のすみ分けが難しく、副題は変えた方がいいのではと思いましたが、各教科で取り組みやすい内容であるため継続でもいいと思います。
-------------	---

C 1 人	・地球環境
-------------	---

(3) 来年度の夏・冬の研修会で研修したい内容

- ・主体的に学習に取り組む態度の評価の仕方
- ・ストレスマネジメント
- ・SOSの出し方教育
- ・不登校の対応(2)
- ・ロイロノート等の1人1台端末の活用法(3)

アンケートの考察

(成果)

- ・それぞれが研修テーマの「個別」「協働」を意識し、ICTや1人1台端末を活用した授業に取り組み、授業改善につなげていた。

(課題)

- ・授業における1人1台端末やICTの利活用が不十分であった。
- ・「深い学び」につながる「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業内容を工夫する。

(4) 来年度へ向けて

今年度から、新たな研究主題『主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の在り方』～『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実する工夫の実現に向けて、各教科でICTや1人1台端末を利活用した授業に取り組み、教科指導に生かしてきた。また、1人1研究授業を中心に、相互参観授業を行い、その成果や課題を確認し合うことで、「深い学び」の実践に向け授業改善に取り組んできた。生徒の学習アンケートからもわかるように、1人1台端末を使った協働的な学習を通して、学習課題に興味・関心をもち意欲的に学ぼうとする生徒が多いという結果を得ている。また、教師のアンケート結果からも、各教科で共通して取り組みやすい研修テーマであると評価を得ている。来年度は「個別最適な学び」の場面をより意識させることも含め、研修テーマを継続して深化させ、「深い学び」を目指して授業改善に努めていきたい。